明治四十一年六月十五日發行
明治三十七年五月七日第三種郵便物認可

明治の女子

明治の女子 第五巻六號

水無月號 要目

花の默示……櫻喬生
永生……伊藤民衛
喜悦と力……ヴァンダイク博士
歩行に就て……大森兵藏
生活……下中芳岳
春の行方……大津留千代の
水の精（承前）……辻村靖子
なき妻（ポー）……秋郎生
「高野聖」……白露子
獸類の兒に對する愛情……山田幸三郎

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治の女子

「明治の女子」は日本基督教女子青年會中央委員が發行する機關雜誌也。
「明治の女子」は一年分郵税共金五拾錢一部郵税共金五錢とす。
日本基督教女子青年會は青年女子の衛生、社交、智識、靈性上の發達を計るための團體也。
日本基督教女子青年會中央委員左の如し。

委員長　エム、エ、ホイツトマン
副委員長　岡見惠子
記錄書記　エ、ジー、ルイス
會計　フィシャー
萬國基督教女子青年會同盟委員　河井道子
萬國學生基督教同盟會委員　宮川すみ子

東京在住委員
津田梅子　渡部瀧子
エ、ピー、ウエスト　井上友子
平野濱子　鈴木歌子
中島小春　井深花子

地方在住委員
大阪　ケー、ツリスツラム　京都　松田道子
京都　ジ、エス、フエルプス　仙臺　エル、ザフルー
名古屋　イ、エム、ツーパル　廣島　エヌ、ジー、ゲインス
日本女子基督教青年會幹事　エー、シー、マクドナルド
同副幹事　エス、シー、フキツシヤー

明治四十一年六月十三日印刷
明治四十一年六月十五日發行
東京市麹町區土手三番町十五番地
發行兼編輯人　エー、シー、マクドナルド
東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷人　島連太郎
東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷所　三秀舍

日本基督教女子青年會の事に付き御尋ねの節は東京麹町區土手三番町十五番地同會事務所宛にし御尋相成度候

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

基督教
女子
青年會

夏期講習會要覽

役員（イロハ順）

井深花子
ミスルイス
和久山駒子
河井道子
武田彰子
ミス、マクドナルド
寺島澄子
宮川壽美子
澁谷ウタ子
持館冬子
須藤餘奈子

趣意

今や我國キリスト教漸く隆盛に到らんとし人多く好んで其教義の研究に務む然れども其源泉たるキリストを學ばんとする者尠きの觀なき能はず此れ恰も涼風を好んで樹下を避くるに均し即ちキリストは喜ばずして其教を賞せんとするに似たり誠に歎はしき事といふ可し我基督教女子青年會は玆に見あり我國婦女子をして如此偏見を矯正せしめ高き潔き愛の源たる救世主キリストを學び其泉より流れ出たる宗教の眞理を味はしめ乃ちキリストと神とし主とし友として心靈上の修養を計り以て信仰を强固にし健全なる社界を造出し各自の幸福を進め友誼を厚からしめんの目的を以て玆に第三回夏期講習會を開催す人謂ふあり夏期は身を淸涼の地に避け放縱戲遊の間に可惜日を消過すべき好時期なりと、然り時は良好なり而かも神が我等に與へたる安息の好時期なり然れども誰か安息日なるの謂を以て各日曜日を徒らに消費せんとする者あらんや即ち夏の安息期は平恒の業務を止め暫らく心身の休養安息を計の謂にして放縱遊惰に消費すべきの時期に非ざるなり。

生後僅かに雙夏を重るに過ぎざる我稚き講習會は神の祝福に浴して過去貳年に於て得たる會合の趣味裨益も亦尠しと云ふ可らず今亦玆に三度閑雅幽靜の地をトし綠蔭深き處圓座胸襟を披ひて所信を述べ經驗を語つて交情を温め袖を連ね手を携へて郊外風致を賞し冶遊勇壯なる遊戲競戲の間不知に智識の交換品性の陶冶、靈性の活動を圖るの好期を得んとす冀くは淸淨の諸姉基督教信徒なると否やを問はず總て道を求むる有志の婦人奮て來臨あらんことを

格言

キリスト—門……（約十〇九）
　　　　　救主……（約二〇十一）
　　　　　基礎……（哥前三〇十一）

イエス曰けるは我は途なり眞なり生命なり（約十四〇六）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

會主

日本基督敎女子青年會

會期

自明治四十一年七月十四日（火曜日）
至同　七月廿一日（火曜日）

會場

東京青山女學校

同院は東京市の西隅に位して閑靜幽邃汽車電車の便亦最も宜し構內二萬餘坪廣大なる土地を專有し洋風の建物綠樹影濃なる間に散在して都會の紅塵を去ること遠く空氣また清爽眞に別天地の觀あり
（電車）　青山終點にて降車（學院の前）
（汽車）

題目

聖書研究。青年會事業研究。各種講演。祈禱會。懇親會。質問會。茶話會等。

講師（イロハ順）

井深梶之助君　同　花子夫人　新渡戶稻造君
大森　兵藏君　柏井　園君　津田梅子女史
植村　正久君　山本邦之助君　山室　軍平君
宮川壽美子女史　元田作之進君　（其他推選中）

費用

講習料　金五十錢　（開會中）
滯在費（食料寄宿費）　金四十錢位　（一日分）
但し寐具一切用意あれども敷布、枕布、箸、草履等は各自携帶の事

附言

會業者は成るべく寄宿されん事を勸告す夜間講演後婦女子の監督者無くして歸宅するは宜しからず
來會者は可成校旗或は會章を持參ありたし

事務所

基督敎女子青年會
　麴町區土手三番町十五番地
照會は三錢切手封入若しくは往復葉書にて申込る可し

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

神を愛せよ

明治の女子　第五巻第六　水無月號　目次

夏期講習會要覽

論説

花の默示……櫻　　　　　喬　生
永　生……伊　藤　民　衛

靜思

喜悅と力……ヴァンダイク博士

雜纂

步行に就て……大　森　兵　藏
獸類の個人に對する愛情……山　田　幸　三　郎

詞藻

生　活……下　中　芳　岳
春の行方……大　津　留　千　代　の
水の精（承前）……辻　村　靖　子
なき妻……秋　郎　生
高野聖……白　露　子

青年會記事

會告○大阪プール女學校○女子學院○宮城女學校○橫濱共立女學校。名古屋靑年會記事

人を愛せよ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

論説

花の默示

櫻喬生

「古昔グリースに一少年あり、水仙の花美しう湖畔の水に映じたるを凝視(みつ)めて果ては恍惚我を喪ひ遂に水に陷りて死せり、一少女此の少年を慕ひ又水に投じて死す。」

あはれ美しうもなつかしの物語ならずや。此の少女深く少年と相知り相契りたりといふには非ねど、たゞ花に見とれて水に陷り、恍惚として無我極美の裡に同化せる少年偉大の詩感に打たれて、覺えず胸の琴糸かき亂したるなるべし。さるにてもあはれになつかしきは一念少女が心ならずや！

由來西歐物語の中にて男女同死などいふ事實に接するは、近代獨逸音樂界の鼻祖ワグナーのオペラ物語を外にしては極めて稀に見る所、元より是宗教上自殺を以て神の聖旨に反するものとし、勉めて嚴肅なる制裁を加へたるに依るならむも、此の物語の如きは淸き男女相愛の情操を美化し得たるのみならず、「水仙の花」を愛の一對象として地上の生命を忘れて美に憧れ、崇高神美の天界と密に相融合したる點に於て吾人はそゞろに一種崇美の詩感なしとせず。

さるにてもあはれなるは彼等靑春の兒！愚かにも無生の花に醉ひ人生以外の美に憧れて遂に地上大事の生命を捨つ。何等愚昧の振舞ぞ……とあだし人の非難嘲笑もあらむ。されど靜かに思ひ見よ。此の穢れ濁れるうつし世に一點崇高神美の種子を我等が胸深く移植するものは何ぞ？あゝ世に花の淸らに美しきばかり心ゆくものの又とあるべきや。我等四季さま〴〵なる花の美に接するごと常に現世の羈絆を脫却して天上無我の樂園に彷徨へる心地切なり。みよや、枯梢落實、天地肅

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

殺たる雪の日にも尙ほ玉椿の一點燃ゆるが如き紅を點じて人の心を和ぐるあり。朔風霜雪の中にも尙ほ梅水仙などの欹然として一味の生命を與ふるあり、吾等是に依て將に消えなむとする胸間一脈の熱火を支ふるに非ずや。あゝ何れの場所、何れの時か吾等花を忘れ花の美と隔つべきや。花は是れ神の默示、フロラの表現に非ずして何ぞ。

時は五月の春半ば、ゲーテのファウストは美しき少女マーガレットとフロラの御園に下りたちて花中愛を語り心情崇美の胸裡を開く。駘蕩の風暖かに青春男女の袖を拂へば胡蝶は翩々として空間に翔る。此の刹那マーガレットは美しき花の一片手に持ちて、

Liebe, Liebe nichts

を繰り返しつゝ低聲花辨を數ふるの時、あはれ花の一片などてふかき眞情のなからざらむ、俄然少女が「愛し給ふ！」と叫びの聲を發したりし時ゲーテのファウストはそも何とか答へし、

「おゝ愛兒よ、花の默示を疑ふなかれ。是れ神の御言葉なり！」

あはれ花何ぞ語らざらむ。神の御光は宇宙至る所に滿ち／＼たり。木の葉の囁き水の流れ、果ては吹きくる風の音も、などて聖旨のなかるべき。佛は散りゆく花の一片に人生無常の涅槃を示し、キリストは谿間に淸き白合花に「ソロモン大王が榮華の極みも此の花の一つには及ばざりき」と大聲喝破し給ひしに非ずや。

詮するところ花や決して無生無心のものに非ず、吾等苟も誠を盡くし胸の奧底を開いて花に對せむか、此の刹那などて一種尊き花の感應なかるべき。花の薰りや花の色、形體色香の美はやがて是れ人と花との間に一種の密邇たる精神的心情の交通を結ばしむべき唯一極美の媒介者なれ。吾等が一念花の美に打たれて恍惚無我の境致に迷ふの時、花は我れに、我れは花の中にいつしか埋沒混融して一心同體となるには非ざるなきか。あゝ花や決して無生無心のものといふべからず。

然らば花には感性ありや愛情ありや。おゝ友よ暫し無用錯寞の疑を挾むなかれ。吾等が知らず識らず花の

美に打たれ恍惚無我の境涯に彷徨するの時、その刹那如何で花に生鮮潑溂の感性なからざらむ。如何で一脈温平の生命なしといはむや。

＊　＊　＊　＊

「さがる程名はあがりけり藤の花。」櫻花既に詩國を急いで野路には躑躅菖蒲桐花匂へり、菫、蒲公英、牡丹、芍藥みなとり〴〵におかしう美しけれと紫雲たなびく藤波の何故なればかくは我が胸を動かすやらむ。なべて花は吾等に一念清き神の愛を敎ふると同時に又一種妙なる温雅の道德を敎ふ。「さがる程」あゝ名はあがりけり藤の花。謙讓悠雅の德だにあらば我等の心は藤波の御空に高く薫するが如く常に美にして淸なるを得む。さればこそキリストも『凡そ自己を高ふするものは卑うせられ、自己を卑ふするものは高うせられむ……
……(馬太傳二十三章)』とは敎へ給ひつれ。詮する所花や之れ吾等人子の好師友たらむなり。

あはれ願くは彼等少年少女が水仙の美に一身の生命忘れたらむごとく、我等をして眞に花を愛し心を盡し意を盡して父なる神に捧げしめよ。彼等年少氣鋭の男女が一片極美の花に對する愛情の至高至純にして自己なる心の欲求なりしが如く、願くは吾等をして父なる神に接せんとき此の無我なる極美の憧憬ならしめよ。神や常に世を惠み人をはぐゝみ給ふ。時に花に現はれ樹林に宿り雨に風に淸泉に常に妙なる御姿を現し給ふ。あゝ吾等朝に夕なに心を洗ひ胸を淸めて常に神を稱へ花の默示にきかむかな。

永生

伊藤民衛

人生の眞意義は死に關する明切的確なる信仰を基礎として後初めて解すべきものである。如何にして生くべき乎とは人生の一大疑問なれど如何にして死に處すべきかは更に大なる疑問である。高山林次郎氏曰く

あはれ其生を見て其死を見ざるものは人生の根本を遺れたり。死は凡ての物の終りにして又凡ての物の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

初めなればなり。されば人々死を考へよ死を考ふるは人生の目的を考ふる也。如何にして生くべきかの問題は則ち如何にして死すべきかの問題なり。死を考ふるは死滅を考ふるにあらずして永生を考ふる也。死は人生の究竟なるが故に永生は人生の目的なり。

死は生物の普偏的にしかも必然的に免るべからざる運命である。消耗は供給によりて全く補充せらるべきものではない。吾人は無窮に吾人の肉體を持續し得るものではない。實にあだし野の露消えざるときなく鳥部山の煙立ち上らざる日なき習い人は必ず死すべく逐に逝くべきものである。良行運德よく一世の曉鐘たりし孔子ソクラテスの如き英靈非凡の士乃至は敢爲下拔の氣象よく一世を震碎したる奈翁歷山の如き雄俊偉傑の士と雖もなほ死の怖るべき羈絆を脱することは出來なかつた。實に死は人生の常事にして今更驚必愕魄を來たすべきではないが然かも吾人は父母兄弟朋友の死に遇ふごとに何時も新なる感動に打たるゝのである。

「可憐無情河畔骨。猶是春閨無裡人」吾人が且暮腦裡を離れず戀慕ふ人と雖も何時吾人の血涙袂を流す悲風泣雨の死に到るやも知れぬ。否かく云ふ吾人と雖も明日ありと思ふ心の仇櫻夜半の鬼氣陰風に吹き誘はれぬとも限られぬ。あゝ死！世に於て此程忌み嫌はれて居るものはまたとあらうか之を聞くだに縮首悚然たるの感がある。然かも吾人は一呼吸づゝ一妙時づゝ刻々と死の門に急ぎつゝあるを覺ゆるのである。

昔不老不死の靈藥を天下に得んと其心身を焦衰したものもあつた。吾人は如何にもしてこの恐ろしき死の手より脱れ去らんと勉めた。然れどもこの自策自勵は恰も水流を其源泉に導かんとするに均しく全く不可能のことであつた。果ては園遊の會舞踏の宴に妄れ醇醲に酔い肥鮮に紛れんとしてもそは唯一瞬時に過ぎざることにて歡樂極つて哀情多く却て悲痛の度はいやまさるのみである。「夫れ人の生命は所畜の饒かなるにはあらざるなり……無智なるものよ今夜爾の生命取らるることを知らざるかさらば汝の備へしものは誰が有と

なるや」財産も地位も名譽も死の前には全く無力である。否之あるがために却て現世の高臥安樂を慕いて死を嫌厭するの度を増すに到るのみである。亦せめての思ひに其墳墓を壯大にして金を鏤め石に刻して名の後世に生きんことを求むるものがある。されど時は凡ての物の破壞者である風雨幾載時移り人渝り桑滄幾度か變轉してもなほ墓標獨り萬代に全きを得べきの理あらうか。是の如きは永く生くるの道ではない。ここに於てか『飮むべし食ふべし我等明日死ぬべければなり』とストイック派詩人の歌いしも無理ならぬことである。

眞に死は吾人を永却の睡眠に導くの關門なるか。吾人に限りなき消滅を告ぐるの鐘聲なるべきか。もし死にして果たしてかくの如くんば吾人の生れしは呪ふべく哀むべきの極みてある。されど吾人は生に於て目的を有す死のみ豈偶然なるの理あらむ。花や菓なり菓や花なり。生や死なり死や生なり唯吾人の見解如何に因るのみてある。吾人は生きなければならぬ。永久に生きんことを要する。死は萬物の命運なりと雖吾人はこの死を超越して其永き生命を續けねばならぬ。吾人はかくしてこの怖るべき死の中にてなほ希望に充たされたる一道の光明の赫くもののあるを信ずるのである。

誠に希望なく光明なき死より悲しむべく哀れむべきものはない。此の希望この光明を得んがために幾多の人が煩悶し動哭したか亦しつゝあるか知れぬ。如何にせば死してなほ生くるを得べきか。基督の十字架はこれがために來たのである。

人は其肉に於て其皮想に於て死するもその靈魂は依然として居る吾人の生命は動物的形體の保存で小狹き境遇にのみ止まるものではない。たゞ吾人の肉身的情慾は罪業の荊棘となつてこの無限に存續すべき生命を蔽ひ隱して居るのでこれこそ死の根本病源である。基督はこの罪をさへ吾人の胸裡より取り去らば、そこに吾人をして死の悲しみより解脫せしめ得べしとの確信によりて十字架の犧牲とはなられたのである。コルゴタの山上斜照影消えて基督の熱腔より水と血汐の流れ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

出でたる時は萬國の民は齊しく彼が救のもとに集合して永りなき生を得るに至りたるの時であつた。

それ神は其生たまへる獨子を賜ふほどに世の人を愛したまへり此は凡て彼を信ずるものに亡ることなくして永生を受けしめんがためなり……子を信ずるものは窮りなき生命を得子に從はざるものは生命を見ることを得ず　　約　三〇一六、三六

罪の價は死なり神の賜は我儕の主イエスキリストに於て賜はる永生なり　　羅　六〇二三、

誠に實に我爾等に告げん一粒の麥地に落て死せずば唯一粒にて在らむ若し死なば多くの實を結ぶべし

約一二〇二四

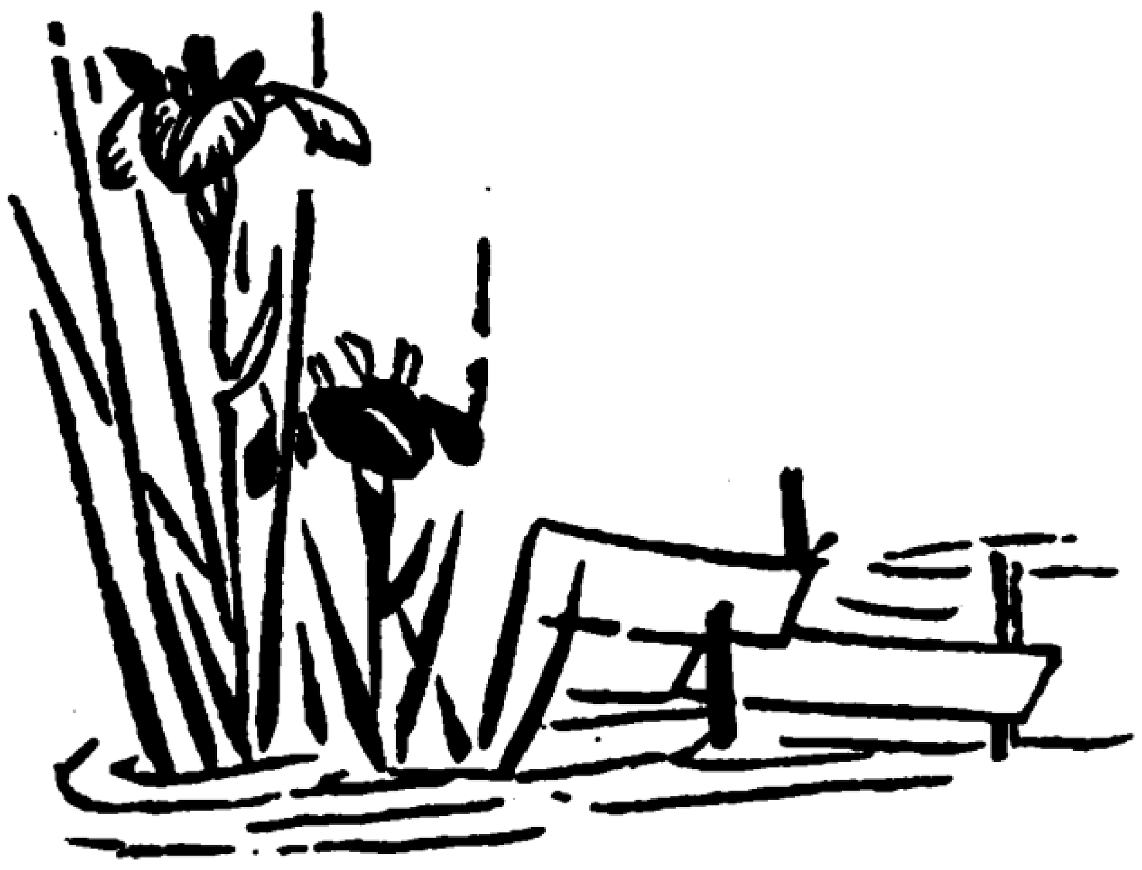
一粒の麥地に落ちて多くの實を結ぶとは何等の奇跡何等の神秘だらう。

抑も吾人が日夕營々として働く所以のものは徒らに衣を求め食を得んが爲めであらうか。元より一般動物てふ必然の結果よりして自己保存の欲望は肉體の上に生起するは勿論である。されどなほ之を超越せる奥妙なる心靈的何物かの存ずることとは非定すべからざることである。即ち吾人の活動努力なるものはたゞある期限の間生理的生命を持續するためならずして高尙深遠なる心靈的生命の發展を意味するものである。これが即ち他の一切の生物を凌駕せる人類の特殊的品性で人間の人間たる眞に萬物の靈長たる所以である。もしも吾人がこの光華燦爛たる心靈的生命持續のための活動てふものを忘却して他の一切の生物と等しく肉體のための活動に止めんとするに到つては實に人類の忍ぶべからざる最大恥辱である。實に心靈的生命の發展即基督の十字架は吾人日常の活動に忍耐と錬連とを與ふるところの最大理想である。吾人の心血の運行鈍き現在は依然として理想と伴はざれどなほ理想に向つて活動し向上して居る。しかしてこの理想は吾人の祖先の理想にして亦吾人の孫々の理想たるべきもの古今を貫き東西に通じて永遠に人類の前に揭げられて居る。個人の死によりて死することなく肉體の滅ぶると共に滅びざるもの否却て個人の死肉體の滅ぶるによりて活かす

ことを得べく光彩を加ふべきものである。

我等は永生に到らんがために生れ永生を得んがために奮勵して居る古往今來吾人の肉體は如何に長命すとも百歳を越ゆるは極めて稀である。されど吾人の靈的生命は決して之と共に消滅するものでない。ポーロ曰く『我等が外なる人は壞るとも内なる人は日々に新なり』と吾人はこの空間時間を絞して天地の間に磅礴なる大生命大精神を宿して生れこれを發展し實現せんとして生活しつゝある。吾人にこの覺醒あり實驗あらば何の憂があらん須らく歡喜に感謝に溢るべきである。かく云へばとて死の早からんことを願ふべからざるは勿論である唯吾人はこの覺醒あるによりて『死よ汝は何處にありや黄泉よ汝は何處にありや』と勝利の凱歌を奏することを得るのである。

吾人は彼の崇高なる基督の人格を仰ぎ見るとき常に毎に一種の生命を感ずるのである。されば吾人は基督を信じ基督を學び基督を仰いでこの世のことに從ひ義しき戰を戰ひ馳するべきの道程を盡し主の召し受けなば喜悅と感謝とに充ち滿ちて勇んでその膝下に參じ備へられたる義の星を受くべきである。吾人は主基督の大なる權力と深き慈愛とによりて死に打勝ち得るの特權を與へられたることを深く感謝するものである。



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

喜悦と力

ヘンリー、ヴァンダイク

左の一篇はヴァンダイク博士が某大學に於て講話せられし"Joy and Power"の梗概である。頃日此の一篇を繙て非常に興感を覺えたので左に其の大要だけを紹介することにしよう……（榎蒼生）

If ye know These Things, happy are ye if ye do Them.

爾等若し之を知て此の如く行はゞ幸也。

（約翰傳第十三章十七節）

私共は今暫らくの間幸福に關する所説に就てキリストの御教へを考へてみましよう。

何人を問はず人は極力幸福であれかしと云ふ熱望を持つて居るが吾等は之を以て正しきものと考ふべきであるか、さりとも又不正不當のものと思考すべきであるか。若し又此の慾求が正當であるとすれば吾等は之に對して如何なる條件を附加すべきであるか。此等は幸福を論ずるに當つて少くとも吾等の頭上に降下すべき二大要目であると信ずる。

一

幸福を希望するの情は疑もなく之れ人間自然の聲である。否人が或る事物に向て慾求希待して居ると云ふ事實其の物が既に之れ人間であるといふ一標象ではあるまいか。吾等の靈が若し春風和樂の狀態にあるならば是れ所詮は理想の滿足を意味するものである。由來聖なるものは之れ圓滿充足のものである Holiness is Wholeness 吾等が人生の眞目的を表現せんとする場合に於ては其の努力の中心に於て固く植ゑ付けられて居る美しい幸福の萌芽を認知するのである。

然らばエスキリストは此の人間自然の慾求である幸福に就て何と仰宣つたか。幸福は是れうたかたの夢、頼むに足らず求むべからずと否定拒阻の辭を發し給ふ

たのであらうか、但しは又「宗教は是一切自己の權利を放棄する也」と定義を下したゲーテの思想を豫告し給ふたのであらうか。

吾人は以上の諸論に對して強く「否」と答ふるに躊躇せない。由來基督教の中にはストイシズムの峻酷なく佛教思想の冷熱もない。至る所、人間的同情と慰安の色とが滿ちみちて居る。即ち祝福は字句を形成し幸福は其が中心意義を構成して居るのである。神は幾度か幸福を望み靈能の慰安を得むが爲に其が御殿を指して集ひくる人々に對して恰かも天上の宮殿より澄み渡る銀笛の涼しきがごと、絕えず吾等の身邊四周にそが慕かしき愛の福音を垂れ給ふのである。

キリストは又單に捨つるといふ事實のみの爲てはなく常に何等かより善きものを得しめむが爲に人々に向て現在事物の放棄を要求し給ふたのである。一言以て之を蔽へは基督の御教理は破壞に非ずして建設てある。キリストは溢るゝ眞理のかてを以て吾等が生命を滿たし、破るべからざる永遠不朽の富を以て我等の內心を充足せむが爲に此の世に降誕し給ふたのである。さればキリストの福音たるや所詮は是滿足喜悅の御聲である。其の一度響きを發するや決して呻唸悲苦の調に非ずして麗し長閑やかな天來の妙樂である。

一度キリストの御教へに接したるものは幸福を求め願ふことは決して悪に非ず只其の追求する方法手段に於て誤り罪があるといふ事實を直に會得せられるてあらう。俗界の快樂――例へば肉慾に關する樂しみ。此等は元より賴むべきものではない、寧ろ之れ一夜の夢て一種の幻想である。然し地上に於ける幸福――即ち靈の喜び靈の平和に至ては之れ永遠確實の喜である。不朽不磨の快樂である。否キリストの美しき眞の御生涯に觸るべき唯一の鍵ともみるべきてあらう。吾等にして若し空しき淸らの心情を以て之に接したならば必ずや其の奥裡に潛むで居る一種偉大の秘密に觸れるであらう。吾等は今此に其の秘訣ともみるべき四個の條項を數へてみよう。

一、眞の幸福は吾等の內心深く潛在するものであつて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

決して外界事物の内に存して居るものではない。語を換へて云へば眞の幸福は所有財産の多少に依るに非ずして一に吾等内心の平和に在る。

二、眞の幸福は決して一攫にて得らるべきものではない。或る一事物を吾等の眼中に置くことに依て攫得せらるゝのである。幻幼を見むとするものは先づ山路を踏まねばならぬ。清爽の樂音に接せんとするものは自ら樂器に對せねばならぬ。

三、眞の幸福は決して孤立して味ゑるものではない。必ずや社會的共同主義なるを要する。他と共に笑ひ他と共に喜ぶことに於て自己衷情の喜悦は自づと增大するものである。

四、詮ずる所眞の快樂は是れ吾等一個の意志に非ずして吾等人類に對する神意の結果である。故に吾等は謙讓と服從とに依りて神の爲に一身を捧ぐるといふ覺悟がなければならぬ。

以上はキリスト御自身の經歷乃至は其の說敎に依て吾等が學び得べき大なる敎訓である。若し之を簡約して見ようならば吾等は恰も行進の音譜のやうに胸深く秘み入る所のあの强大な清鮮な嬰兒の例證を以て之に應ずるより外に完全なものはないと思ふ。即ち

「恒に神を讚美し神を稱ふ」

之れ人生重要の目的ではあるまいか。

吾等は以上の聖句を以て神の福音の中心元素であると思考する。蓋し新約書の空氣は陰欝でなくて喜悦である。失望に非ずして希望である。心よりクリスチャンたることを喜ぶとの出來ない人は未だ眞に美しいクリスチャンと云ことは出來ぬ。あゝ神を讚美し神を稱ふ。是れ人生最大の悞り眞個主要の歸趣ではあるまいか。

人靜かなる夜半牢獄の窓に凭れてパウロとシラスとは心切なる讚美の聲を揚げた。囚徒は俛首默然として之を聞いた。あゝ此の側面的勢力こそは敎會が與へた一種偉大の靈能ではなかりしか。

"Poor World', she cried, "so deep accurst
Thou Runn'st from pole to pole
To seek a draught to slake thy Thirst,—

Go seek it in thy soul!"

……………………………………

"Tears washed the trouble from her face!
She changed ito a child!
'Mid weeds and wrecks she stood,— a place
Of ruin,—but she smiled."

涙の雫は其が顔の憂き雲を拂ひ清らに涼しき心彼の女はいつしか乙女心の昔に還りつ破滅の裡にも自若として頬邊一朶の笑はこぼれぬ。

あゝ何と美妙の詩句ではないか。吾等例令幾多の困難憂苦の風に打たれることがあつても常に此の洒々たる態度を保つて「神共にいます」といふ欣喜の極致に進むでみたいものである。

今や敎會の多くは初期の面影を失して眞に力ある歡喜の情を失墜して了つた。敎會は一意地上の名譽を求め地上の權力を求めつゝある。古代に比して組織は進み財政は豊かになり知も學も進んだか然もなほ古代より幸福であるとは云へぬ。實際クリスチャンライフに於て乃至はクリスチャンサルヴィスに於て屢見出される缺陷は之れ自然的の欣喜である。おのづからなる喜悅である。

エスの宗敎は吾人に語るに嬉然たる敬神の念は之れ最上のもの"Cheerful pietyis the best piety"の一句を以てした。自然の傾きを枉げて正をなさんとするよりも正をなすべき傾きを有する人はもつと美しい性格の人である　い〱やながらやる服從は自ら喜び進て從ふ美德に及ばざること遠い。人は心に Sweetness を感ずるが故に愛するのである。品性の眞なる test は之れ喜悅である。なぜならば人は喜ぶ所のものを愛し愛する所のものを好むが順當である他人に對して善行をなすことはやがて是自己中心の平和を見出し自己生活をして趣味ふかく高めてゆく要素となる。即ち神を讃美することはつまり神を喜ばせることになる盡し之れ初期クリスチャンの態度であつたのだ。

二

然らば眞の幸福は如何なる條件に依賴しているの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

か、之れ第二の疑問である。キリストは聖書の中に我等に教へて宣ふた、「爾等もし之を知り之を行はゞ幸を得ん」と。

「爾等もし之を知り……………」之れはキリストが信仰に對して與へられた知識である。「もし爾等之を行はゞ」……………之れ信仰がキリストに對して與へたる服從である。「知る」と「行ふ」之れ幸福の宮殿を建設すべき二大方柱である。信仰と生命との融合は之れ靈の喜び靈の力をうべき秘訣なのである。今更私は此の事實を「知る」と「行ふ」との二項に別て說明を加へてみよう。

一、「爾等もし之れを知らば」――吾等は知ることとなしには決して幸福であることの出來ない場合がいくらもある。否是非解決せねばならぬ幾多の疑問が吾人の胸裡には深く潜んで居るのである。之が解決を得ない場合は或は失望し悶へ靜穩をかくのである。之れは吾等人類が意識を具へ合理的に出來て居る以上免れかたき事實である。蓋し人は事物の眞相を見極めんが爲に生きているのではあるまいか。人類は感覺界以上なほ高尚な遠大な世界を見極めるだけの才能があるのである。

ハヂヨン、フヰスケは其の最後の著書たる"Throughnature to God."の中に此の事實を明確に說明している。即ち「生活の薄暗き朝霧に立て人間の靈はボンヤリと之れに似寄つた何物かを求めんとあせつて行く。然し浮遊し急進する現象の實體ではなくそれ以上永遠不朽の實在に達せんとする」と說いているが彼は疑もなく進化論を以て基礎としている。即ち吾人は常に生活と之れに適應する境涯との間の實關係を豫想し靈の進行と展開性とを宗教の久遠的實在に適應したのである。

以上の論旨は大體に於て吾人の同意する所である。然し之れを更に簡約して再言すれば若し吾等にして「爾等知らず知る能はず、又之れを知るべからず」"you do not know, and you never can know, & you must not try to know. と云ふ返答にぶつつかつたとしたらばどうだろう。吾人の靈は決して靜穩ではあるま

い滿足して居ることは出來ない。之れが即 Agnosticism 神秘論とても云ふべきもので人類を不幸に陷らしむる一大源泉であらう。

アーネストルナン Ernest Renan は基督敎は眞實ならざるが故に些の我を喜ばすものなく我注意に値すべきものなしと云つた、が之れは靈的事物を無視したるより起る論理的結果に外ならぬ。――眞個興感なき生活、深き價値なき生活――あゝ之れ broken spring を持たるライフである。

今吾人は上述の理由よりしてルナンの所說を誤れりとして、キリスト敎は眞實(true)のものであると假定せん、然るときに其をして貴からしむる第一要事は吾等が幸福ならんが爲に知らざるべからざる事件に向て精確なる解答を與ふることである。

一言以て之れを蔽へば基敎は一切宗敎の薄霧を掃ふものである。人生問題に對して大なる解決を與ふる宗敎である。自然法など云ふものは之れ宇宙の一小部分にすぎない人界の終始を形成していると云ふ事實を明に指示しているは宗敎である。肉靈二界の主宰者は飽くまでも神である、Spsirit である否吾等が靈の父である、然して此父は決して吾等より遠く離れてはましまさぬ。吾等と深く異なれるものでもない、神は救主として獨り子エスキリストを下し罪と惡とに對する我等が日々の戰に於て救ひの力を借し給はんが爲に常に聖靈を下し給ふている。然り吾等はキリストが人類同胞の罪の爲に喜び勇で犧牲となり給ひしことに依りて罪の許しを得永遠不朽の平和を得るのである。否キリストが復活し給ふた一大事實に依つてキリストを愛し奉る吾等人類同胞は心より死に打ちかちて限りなき生命をたのしむことが出來るのである。

有名なスウキスの民法學者であるカール、ヒルチー Carl Hilty 敎授は云つた、『人間の最始にして最要なる眞個幸福の條件は社會の道德的秩序に對する確固不拔の信念である。何をか幸福と云ふ、此の世界の神性と意識的に融合し調和することと之である。換言すれば神と交ることである。神の Companionship を求める

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ことである。然らば最大な不幸とは何ぞ。云迄もなく神と遠かると云ふ感性之である、かくて人の心は常に波立ち騷ぎ人生はつまらない無意味のものとなつて了ふのである」と說いて居る。

あゝ神、人性、キリスト、神格、聖靈、實在と力、天父、實權、神來默示、實眞、天國の存在、永生、確信。あゝ之れ不測神秘なる陰暗の薄霧を一掃する赫灼の光明である。欣喜を以て人子の胸を充分すべき神來の妙音ではあるまいか。

此の大なる敎訓——生命(ライフ)と威力(パワー)とを與ふる此の一大敎條を無視して基敎を力あるものと思ふのは大なる誤謬である。信仰は唯感情のみの發動ではない。神及び世俗キリスト及び靈義務及び不死に關して確固不變の眞理を獲得するのである。

現時社會が要求し期待して居る所のものは一念確固たる眞實活氣ある敎への定義である。敎會は此の點に於てキリストが命し給ひし御眞理、其の芳しき御敎へを明してやらねばならぬ。人々心情に深く平安の福音を傳へなければならぬ。敎會は常に古人の糟粕をなめて古人の言語字句を反覆するに止まらず之れを出來得る限り近世的に改造するの力がなければならぬ。兎に角神の御胸より出てたる御言葉を吾等は生ける人の言葉の中に宣傳する之れが吾人の要求である。吾人の希望であるのである。

希くは敎會をしてキリストの御敎へを傳ふるに躊躇逡巡せしむるなかれ。又願くはキリストの御敎へをして知識の山頂より深く無知の谷間へと落ちおとさしむるなかれ。願くは人々が信奉すべき神の御眞理の神が人類に要求し給ふ所の義務に就て常に山上の方へと進ましめよ。常に新なる生命を以て創見新美の花を樂しましめよ。之れ敎會か正に神に對し人に向てのみ行ふべき唯一の使命である。

私は神の人格、キリストの神性を信ずると否とは當代人士にとつて些の影響なしと云ふ說を默許することは出來ぬ。もし人にして心より此の事實を信じたなら人は精神的の勇氣を振興して世を樂觀視することか出

來る。もし人にして深くキリストは吾等人類の為に一命をすて給ひし事實を感得したならば普通の死以上墳墓以上の未來性か表はれてくるに違いない。人は之れに依て大なる希望を得之に依て樂しき慰安を得ることか出來る。否限るなき生命の Joyful power を得ることか出來ると確信する。

同胞兄妹諸君、私共は此の尊きキリストの御教へが眞に生きてゐる復活して居ると云ふ事實の為に働き祈りを捧げたいと思ふ。我等はキリストが教へ給ひし眞理に就て各自の立場を一層深くし一倍と堅固にして行かねばならぬ。我等は之れに依て胸深く植へ付けられし幸福を助け、喜びと感興との惠みをうけ入るべきである、否我等は日々の義務日々經驗する題目と密邇として生ずる接觸を心掛けねばならぬ。蓋し如何に高遠なる教訓と雖も如何程眞なる教訓と雖も其の御教へを吾人の生活に適應せない限りは決して幸福を得、神の恩寵を得ることは出來ないのである。

三

以上は if ye know に就ての説明であるが此に第二の if がある、之れこそ眞に幸福を與へらるべき宗教の力が含まれているのである。「もし爾等之れを知り此等の事を行はゞ幸を得ん。」

諸君。知ると行ふと間のには大なる相違がある。Between the knowing & the doing, There is a deep gulf. 此の大きな深い溝（ガルフ）の内にこそ吾等の幸福は沈みゆき消えゆくのである。此の gulf がなくなつて兩者か互に相握手し融合するに非ざれば人生の生活には一の平和なく實在なく永遠の福祉なし。只キリストの教へ給ひし事を知ると云ふことは何も幸福ではない。神は吾等の父であると云ふことを知つても吾等の愛、吾等のサルヴイスは其の父によれることを知らなかつたならば、又キリストは吾等人類の為に死に給ふたと云ふことを知つても尚キリストに從ひキリストを則とすることを拒んだならば、或は又永遠不死の生命は認めてもなほ吾等が得んと欲する此の世の些末なるもの或は肉的快樂の追及に日も之れたらざる者がありとすればあ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

あ此等の人々は慥かに之れ不幸可憐の人と云はねばなるまい。

然し正しく知ることは之れ眞理を行ふ第一步である。否正しき行爲は一段深い幸ある知の方面に導入れるものである。キリストは宣ふた。「爾等もし神の意をなさんとせば先づ其の敎へを明さゞるべからず」と。

あゝ願くは人をしておのが罪を悔ひ神の救ひを求め助けを乞はんか爲に日々に父の御許に來らしめよ。人をして愛の故を以て神に從ひ神を喜ばしめよ、此の人界の詐り怒りの爲に心を亂し失望苦悶せる人々をして此の神の温き御胸に包合せしめよ。もし人にして之れを實行し此の眞理を知り極めることが出來たならば其人は限りなき幸福を得ることが出來るのであろう。又希くは人をして永遠に生くべき知識の光明にふれしめよ、彼れをして俗界紛々の些事慾望を脫却して麗はしき天上の光を望ましめよ。願くは人をして靈の方面に眼をむけしめ肉よりも靈に於てより多く考ふることを得せしめよ。又彼の愛及び友情を淸めて天上生活の一準備たらしめよ。諸君、此等のことを正しくふみ行ふ人は慥かに幸福な人である。ブラウニングの詩 The pistle of Karshish" 中に於けるラゼルスのやうに常に神と共に在ることができると思ふ。當時人々は驚異の眼を以て彼れを眺めて謂た。

「一體あの男は芳はしい人類に光明を與ふる香油をどこから持出したのであろうか此の大きな大人びとは今や子供のやうな淸かな目で以て靜かな此の世を觀じている。」

然り諸君。此の Simple な生涯幼兒のやうな幸福な生涯は慥かに神の敎へ給ひし眞理を行爲に於て生活に於て適應した結果に外ならぬのである。此の如きは人々の心に眞に復活せしむると同時に又敎會に向ても要求せらるゝ一大事實である。

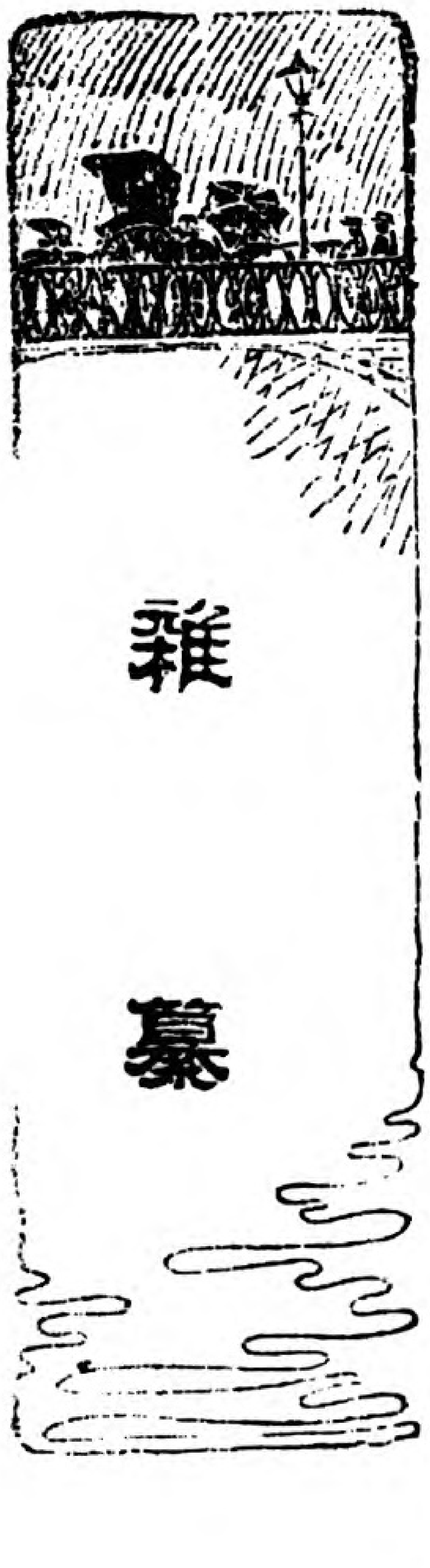
此の Simplicity の復活Sincerity の復活、Work の復活之れぞ吾等に解脫 Salvation の喜びを恢復せしむるのである。解脫の喜はやがて之れ力の革新、力の擴大を生じ出すのである。

あゝ敎會に於ける此の生ける喜悅の缺乏は現世に於

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ける冷談輕視の主因である。否此の纎弱なる疲れはてたる力はやがて之人をして實體の存在を疑はしめ宗教の眞價を誤らしめたる最大源因ではあるまいか。

（完）



雜纂

歩行に就て

大森兵藏

私は先日、日本女子大學校で開かれました運動會の豫習會に臨みまして同校の生徒諸姉が體操や遊戯や競爭なと種々面白い事を遊はすのを拜見しました。第一感心致しました事は此會が全く生徒諸姉の手にて處理せられまして且つ萬端の準備が行届いて順序の組合せ方や其前後の時間が少しも難なく豫定通りに行はれた事であります。順序書(プログラム)に依れは十八番もあり中には幼稚園の兒女なともありましたが實際は豫定の十二時より三十分早く濟だのであります。又會の濟た後では直に係の人々が現場の取り方附けをなし三十分立ぬ内に全く舊狀に復して仕舞ました。自治制で養成された女

子の仕事を執る能力の發達して居る事には實に感心致しました。

體操遊戯は又誠によく出來ましたが私の氣に附た點を申せばどーも足踏みのある體操又は行進中の隊伍の有様になると少し満足の出來ない所がありました。併し全體から云へは姿勢足並は餘程ヨイ方てあります。私は今此歩行と云ふ事に就て思ひ當る事がありますからお話致し度と存ます。元來日本人は一體に足が短て且つ眞直てありません歩行する事は不得手てあります。男子もそうですが殊に失禮なから女の方は歩行が大變不得手てあります。又電車などに乗りましたり渡し船などに乗りますと度々女子の方は少しの動搖の爲めに立て居る事が出來ないて崩れかゝる事かあります。男子よりも此點は餘程弱い様てあります。其原因は種々てありましよう第一は履物第二は服装の關係もありますが私は歩み方に就て少し注意致し度と思ひます。日本ては動作を上品にするには內蹊みにせねはなりません此內蹊みと云ふはどうかと云へば極めて生理上からも解剖學上からも不自然な姿勢てあります先つ直立しますと爪先を揃へますから踵が離れて居ります。上體は自然に少し前方へ傾きまして跨は少し曲ります。既に直立して靜止の時にも正しき姿勢を保つ事か出來ません。是から進行を始めますると足を一直線に運ふ事が出來ません。今左足を前に出すには一度外方に出て又內に入る即ち半圓を畫く有様てあります右は其反對の方向に半圓を畫て前に出てます。是れが馳る様を見ますれば足がもつれて尻か振れて少しても道に凸凹でもありますれば直に轉倒します。且つ全身の重量は餘程重いのてありまして是れは二本の足の上に直立して自由に動ける事は其搆造か最も巧に出來て居るからでありますが、物を立てるに其重力の中心が土臺の上になければならす其土臺の面は大なる程其中心を保つ事が容易であります。今直立して居る人の重量の土臺は兩足を地面に接して居る處に綱を以て其外面を一周りした其範圍內てあります今內蹊にして其範圍を定め更に踵を動かさずして爪先を外方に踐出して外

踐として基礎の範圍を定めて見ますれば其差の大變大なる事を見るであります。即ち外踐の場合には重量を支ふる土臺が大きくなります。猶此踵は重量を支へて中心を保つ能力が甚だ少いのでありますが爪先は其働が非常に大いのであります故に内踐にして爪先を揃へて立た姿勢は身體を支ふるも最も不利益であります。是れに反し爪先を開き踵を揃て居りまするど土臺が大きくなり上體は直立し足は伸びて來ます。且つ歩行するに足は眞直に踐出しまして大股に進行する事が出來ます。隨て歩む速力も加はり活動する事が出來ます。是れは單に女子大學に就て申すのではありません。一般の事でありますが女子大學では跨靴を着用して居る人が多くありますし常に體操がありますから一般より見れば歩行に就ても餘程調子の好き方であります併しまだ充分注意が必要であります。

歩行は各運動の根本でありまして身體の健康上最も大切な事であります。且つ嚴正なる姿勢を保て活歩する事は大に意志教育を補ひまして精神上に大なる關係があります。要するに從來は風俗習慣等の爲めに活發なる擧動を許されませんでした事は女子の健康に大なる碍害でありました然るに明治聖代の女子は幸にして舊思想の羈絆を脱して各方面に發展する事が出來る樣になりましたから此點に於きましても大に改良を加へまして女子の活動を助くる身體健康の礎たる歩行に就て大に注意致し度と思ひます。最近の報道に依りますれば米國のフィラデルフィヤ大學校では歩行會と稱する會が組織せられまして多數の會員が出來たと申します。此種の會は殊に我國にも必要ではないかと思ひます。

獸類の兒に對する愛情

先日科學世界の臨時增刊科學叢書を讀だ中に動物の兒愛心と云ふのに及びました時誠に美しい動物の性情と共に一種悲愴な念にかられ思はず一滴の涙なきを得なかつたのであります。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

猛獸と名が附いてあるだけに誰しも獅子と云ふと先づ第一に野獸の王であると云ふ事と共に恐ろしい獸であつて一吼立ろに萬獸を戰慄せしむるものであつて次に獅子は生れて三日にして千尋の絶壁から蹴落して其勇氣を試すと云ふから兒を愛する樣な事はないかと思ふと其れは大間違てある然し雄は猛惡で而も殘酷な性があつて自分の兒を貪食する惡習があるから雌は自分の產んだ兒を如何に自分の亭主だからとて食はれてはたまつたものではありませんけれども雌獅子は抵抗は決して致しません只兒の安全を計る爲に雄獅子も亦他獸も仲々容易に來る事の出來ない嶮岨な場所を探して山や峯の奥へと居を定めて其處で兒の養育に力を盡すのであります其場所選定の途すがらも細心翼々草叢を分け行く樣な所は自分の踏んだ草が伏した儘になつて居ると云ふと雄獅子や他のものから感附くといけませんから尾を左右に打ち振り伏した草を原(もと)の樣に起して行き其在所を容易に知らしめない樣に致すとは誠に其兒を思ふ注意の周到なるは感服の外はありません此樣に致しまして其子を育て上げて終(しま)ふまで六ヶ月の間と云ふものは飢渴を醫する爲の外は決して愛兒の傍側を片時も離れた事はなく乳を兒に飮まして居ります愈子供が大きくなつて最早自由に飛びまはる事が出來得る程に達すると今度は兒供が自活して行く事の適ふ樣に雌子は餌物を捕へ是を殺し是を食ふ方法を敎へ渴したる時には水を求めて是を飮ましめ實に吾々の慈母が朝夕手に抱き背に負ひ腹に包みあゝ善い兒だ善い子だ坊や坊やと撫て親しみ泣けば乳を與へられ暑きときは烈しく寒き時には暖かに稍生長しては學校にやつて貰ひ追々と自立の道を敎へられると同心異行其愛と云ふ點に至つては少しも違はないのであります斯くも心を盡して育て居るときに若し他から危害でも加へやうものならそのときこそ大變猛烈な力を出し雄よりも一層恐ろしき勢で是に向ひ勇敢頑强に兒を保護するに手段を盡すのであります。兒を思ひ愛する情が斯くまで熱烈であるとは實にゆかしく、私は無量の感慨に撃たれざるを得なかつたのであります。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

扨今度は虎の話に移りまするが虎もやはり猛獸で獅子と共に並び稱せらるゝ巨擘である彼の加藤清正が虎を退治するときの其繪を見ても怖じ氣が附く位ですが是も雌虎の方が非常な兒思ひだと申します。或る時一人の獵師が虎穴に入らずんば虎兒を得ずと何人より聞きましたか或は全く知らなかつたのかも知らんが單身危地に踏み込んで行きまして母虎の不在に乘じうまく二疋の兒虎を生擒して喜び小踊りしたのは瞬く僅の間母虎は餌を求めに行つて來たのか反りて見れば自分の可愛兒はいつのまにか其影も姿も消え失せて居りますので如何しで其儘にして居られましやうが必や他の獸か或は人間の仕業と感附いたのでありましやう四邊を頻りと探す程に件の獵師の今や二兒を腋下に挾んでどん〱逃げ行く姿の眼に入るや否や母虎は其獵師を目掛けて大に怒り驀地に猛り追ひ掛け來たので早や獵師も如何とも仕樣がないので一疋を捨て其間に逃げのびて一疋でも安全に持ち反らんとしましたか母虎は一兒を口に啣へ速に是を洞穴の中につれ反り再び獵師の後を追ひ詰めて來たので復たもや危險は肉薄して來ましたのでありますす彼は最早絕體絕命虎の兒を惜んで捨てなければ飽くまでやつて來て終には其身悲命に終りを遂げるやも知れんので彼は是迄也と覺悟して折角盜み取つたる殘りの一兒をも捨てゝ漸々の事で免れ反つたと云ふ事でありますす母虎は可愛兒供を取り戾す事が出來たので、欣然として彼の洞穴の方へと去つて行つたそうですが此處で御互に其虎の心になり代つて見たら如何でありましやう自分の兒を奪はれて自分が歸つて見たら居らないと云ふ時には何うでしやう、まー私共の故鄕では母親は狂氣してあちらこちらと大きな然も淚ぐんだ聲で自分の兒を探し廻ると云ふ風で其心根は誠に云ふに云はれぬ悲に滿たさるゝでありましやう獸だからとても虎等がかくあるは人間のそれと比べて實に愛兒の情かゆかしく感ぜらるゝのであります。

　倘ほ今一つ虎に就ての御話がありますす長らく印度に留まつて居つた我退職一武官の實驗談だと云ふ事であります。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

或時野營して居たとき其場所より程遠からぬ處に虎の巢窟ある事を聞きましたので彼は雄心勃々好奇心と合せて是非共虎をば美事手の物にしてくれんづと或天氣の善い靜かな風も枝を搖らさぬ日に獨り銃を手にして敎へられたる方へと歩を移したのであります草木生ひ繁り人跡も未だ到らざるかと怪まるゝ程に困難な處を奥へ奥へと探し進む中に突然雌虎の大なる足の跡を見附けたのでありますかさすがの彼も慄然たらざるを得なかつたとの事てす其より是をたどり尙ほも前進を續くる程に前方に當りて前庭には木も竹も植つてない十五間四方もあるかと思はるゝ空處を控へた廢寺か或は廢墟然たる狀のものを發見して是なん聞き及べる虎の巢窟ならんと思惟して自分の姿の見えない樣にして呼吸を抑へて其空地迄寄り附いたときに彼方の其城壚然たる奥の方に母虎が二兒の側に臥して頻に舌てなめて居るのが見えたので彼は直ちに發砲を試みた轟々たる音響に母虎は忽ち身を起し今や危險の自分に迫つて來た事を知つたのである母虎は前路を掠められたか是位の事には少しも動じない早速一疋の愛兒を巢窟に運び再び殘りの一兒をつれ反らんと急がしくやつて來たが第二の銃丸は無殘にも母虎を倒した母虎はいとも苦しげに咆哮して居たが斯く今はの際に至つても兒を思ふ心は如何ばかりならんか全力を盡して漸くの事で兒を引き擦りながら連れて行つたのであります暫く經てども虎が來ないので恐る〳〵其處に行つて見ると虎は二兒の側に既に彼の世のものとなつて居たと云ふ事てあります。

あゝ母虎が兒を思ふの情切にして此危機に於て身を顧ず終に先づ〳〵兒を安全なる處に運んだが其致命傷の爲に愛する二兒此樣にしても助けた二兒に別れるのてあるかと思ふたときには母虎の心は何の樣であつたてしやう人の母が死するに際し兒供を近く呼び「坊やおとなしくして御父親樣の言ふ事をよくきけよ」と一言を名殘りに此世を去る其心の底を思ひやると誠に悲愴な念か浮て來るを禁じ得ないのであります人の母死して尙兒を愛する父がありますけれ共獸に於ては多く

其雄は兒を愛する事を致しません。然るに虎が其二兒をはぐゝむものなき此世に殘して死んだのは思へば思ふ程其虎か氣の毒になつて實に同情の涙なきを得すには居られず思はず手を眼に致した事でありました。

此外猿や栗鼠や鯨や熊や或は狐、河馬、鹿等の兒愛心に就て讀みましたが最も私の心を動かしたのは以上の二獸の話てありましたので此處に御話しましたが殘りのものに就ては此處に略する事と致します。

是を讀んで私は眼を閉ぢて何から何と聯想しました結果終に現今世の或階級中に幾多の人間て彼動物に劣るものがあるかと思ふたときには實に慨嘆に堪えなかつたのてあります。

廣く申せば人間も鳥も魚も獸類も皆動物てありますが然しなから人間は自分勝手てありますか知りませんか古來動物と普通言ふものより外に區別して非常に高等なるものとして萬物の靈長だと考へもし云ひもして來たのてあります其樣に肉的方面から觀たならば決して誇るべき點は多くありません却つて自分の考へては餘程欠けた處があるだらうと思ひますけれ共是を靈的方面から研究して觀たならば確に非常に他動物より勝れた點が多くあると考へられるが爲に其靈長たる名も怪しむなくして今日まて至つたのてありましやうさはさりながら皆樣、先日の商業界と云ふ雜誌に、有名なる谷子爵が世の開くるに從つて人道が益頽癈すると云ふ事を言ふて居られた如く或社會の階級中には此愛兒心なるものが漸々と世之進歩に反比をなして薄くなりつゝ否々彼の動物と呼ぶものよりも一層劣つて居はせないかと思ふのてあります。事物は何も一面からのみ觀ると兎角間違の種となるに依て少くとも表裏の二面から是を研究するの必要がありますが例へば彼の遊女の如き者てす中には往々自己の汚れたる心からして彼等の仲間入りをする者もありましやうが私の考へますのには多く家政治らず貧に迫られ糊口に窮して終に其親が無情にも彼等の身を金に代へて道ならぬ巷に苦ましむるものてあらうと信ずるのてあります。則ち彼等の親は自己の兒を殺して飢餓を醫する爲に食ふのと理屈

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に於て少しも異らないと思ひます彼の猛獸が危機に處して尙ほ其兒を捨つるが如き事をせないのに比して如何でしやうか斯く申すと或人はそれは愛の極その樣に女郎にするのであると云ふか然し淺墓な考かと存じます又新聞の三面に能く見受ける事ですが子を殺したとか貰子を餓死せしめたとか近來頻々として起る樣ですが是は正に兒愛心の滅退を證明する實例かと思ふのであります。彼等は何の爲に兒を殺すか何の爲に貰子を餓死せしむるであらうか或は自己の汚行を包み隱さんとし或は又窮困明日の食に詮術なく或は金を得んためとか種々ならんが歸する處自己の生存上都合良からん事を希ふて其兒を思ふ念慮は自己の苦痛よりも遙に少量にして終に其行爲に出づるのであると斷言するも過言ではありますまい彼等は文盲無學の徒のみか否らず常識も備へ相當の敎育を受けたるものもあるあゝ吾々の同類で斯くも動物より劣る處の人間があるかと思ふたときは此等獅子や虎の行爲に對して其等の人間が萬物の靈長だと大きな看板下げて居るのが實に耻かしい次第で思はず嘆聲をもらしたのでありました此に於てか私共は非常に大なる責任のあるを感じたのであります。此大責任は誰に依つて成す事が得らるゝのでしやう。惟それ神あるのみ。尊き神は是等人類を萬物の靈長たる名に負かざる樣になし給ふのである。

生活

上

下中芳岳

布引の瀧の下流を海へと運ぶ新生田川、その川口に架る日暮橋を境に、海に沿ふて東へ幾丁、明治の大御代にも戸籍に洩れた人の數、年毎に殖ゑる特種部落、新川の二百軒長屋といへば、このあたりのものは誰も知る、淺ましい片輪者どもが、町はづれの田畑の中によく見る下肥の溜壺、その中から引ぱり出して來たのではないかと怪まれる程の襤褸を身に纒うた人の住つてをるところ、鼻を衝く悪臭汚濁、見て通つて嘔吐を催さぬものは稀である。

廂は飛び、壁は落ちた一棟三十軒の長屋、これでも人が住まば住める、住む住むとて三疊に四五人の家内も少なくない。

東から四軒目、表札こそ打たね。「お鶴さ」言へば誰も知る、この社會では働きもの、正直で、思ひやりのある、この部落には珍しい、一軒を奥口の二つに仕切つた三疊一間を借りて、今年、二つになる幼兒を、ともかくも育てゝ行く。

紀の山を越え、渺渟の海を越えて、朝日は、今、この穢しい住居にも射し込む。

夏なれば、煮しめたやうな湯卷ひとつ、だらしなく膝をくづして雑炊を掻き込むのはその「お鶴さ」である。傍に腹ばつて、手づかみで、皿盛の何かを頰張るのはその兒なので。

『お鶴さ、早いの』。

と戸口に立ちふさがつたのは、汚れて瘦せて片眼つぶれて、腫物のある頭には、髮の殆んどなくなつた男、躄に化けて匍ひ蹲るのと、悲しげな聲を振り絞る

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

のとに妙を得てをる外、何の能もない。それに、この四五日を烈しい下痢て、稼くことが出來なかつたのだから、食物とては、芋の切れ端一つもない。

「おゝ、源さ、今日は、ちと快いかよ。」

「快いも悪いもお前、昨日、お前様にもろた、あれて何にもたべないのだから。」

「空腹かろ、これても一杯食らんせ。」

お鶴は心から心切げに、餘つた雑炊を皿に盛つてやる。

源は、舌皷うつてそれを見るまに掻き込んで、

「あ、これて生きた、お鶴さ、ありがたい、この恩は忘れん。」

悲しげな中にも力の籠つた聲て感謝して、

「時にお鶴さ、願ひじやが、今日一日、己に、その兒供を貸してくれめえか、儲かりや、三錢と四錢は借賃を出すじやが。」

お鶴は、考へて、

「だがな、毎日、助さが連れて行くだから、默つて、お前さに貸すわけにも。……何なら、助さに、お前から話して見るだよ。」

と、そこらに、兒供のちらした食物を拾つてたべながら食器を積みかさねる。

說明しておくが、世には育兒院といふがある。育てる困る子を引き取るのだ。保育所といふもある、子供を連れてゐては、働くに困る貧民のために、その子供を預る所だ。が、この部落ては、子供は反て、邪魔どころか、大の男を養ふのてある。お鶴は働きものてあるから、晝は、海岸の船着へ、南京袋の繕ひなどして金を儲ける。それて子供はどうする、いつも、今いふ助に貸す、助は借りた子に何か食はせて、借料として日に二錢か二錢五厘をお鶴に納める。それを今日、飛入の源が、貸せといふので今の話。

源は又、助に相談してもだめだと知つてをるから、思ひやりの深いお鶴に泣きついて、助をだしぬいて子を貸りて行かうと企圖んだのてある。

「だがお鶴は、助んさに己がたのんでも聞くめえから、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

たつた、今日一日のことだ、己を助けると思つて、…
……な、お鶴さ、己も、この身體じや、他の働きは
とても出來ず………。』
打委れるのをお鶴は不憫に思つてか、
『そんならまあ、連れて行くだか、だがお前、饑やし
やしないかよ。』
と兒を抱き上げて乳房をふくませる。
『己も人間ぢや、そんなことはしない、それに、これ
だけお鶴さにや世話になるだもの。』
願ひの叶つたのを嬉しげに源は笑ふ。
お鶴は、幼兒の頰、口のまはりに、鼻汁やら、食物な
どが、一面に附着いてをるのを拭うてやり、それでも
一日の別れの接吻を輕くして、
『ほら、源さといつて來い、泣くなよ。』
と源に渡す、源がうけとつて、ほいほいとあやしてゐ
るうち、お腹の十分になつた幼兒は、何も知らずに早
や眼をとぢて眠つてしまう。源は、ふしぎさうに、そ
の顏をじつと見て、
『ほ、早や眠てしもた。』
と莞爾して、
『じや、お鶴さ、今日は、これて、一稼さして來る。』
と元氣づいて出て行く。
朝晴の空は、今、やゝ曇り氣味と變つてきた。

下

罪があるから懼れる、怖れるから迷ふ。人の心に弱味
のある間、迷信はこの世を去らぬ。
東京を中心として、成田、池上、穴守の繁昌する如く
神戸では、摩耶山、夜を晝について參詣する善男善女
の跡は絕えぬ。
今は九月一日、摩耶山の殊に賑ふ日である。參詣道の
喉首に當る春日野の墓場、その曲角に、匍匐へる異形
のもの、肩付も腕も露な褸衣、肌に苔の蒸せるかと黑
き、片眼ばかり怪しく光る、側近く坐らせた幼兒は、
何か食物をしやぶつてをる。
『お慈悲深い旦那樣やら奧樣方、足の利かない片輪者
でござりまする。身一つは饑えて死んでも厭はねど

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

母に別れたこの幼兒、どうぞ不憫とお助けを。……
…南無大慈大悲の觀音樣。」

悲痛の聲を振絞つて、泣くやうな吹くやうな調子で、繰返しつゝ頭を下げる。

參詣、下向の摩耶道者には、職人、手間取、下婢、工女、商人の御新造もあれば、長屋の神さんもある、紳士、學生、子供、老人、中には良家の令孃もある。

「お慈悲深い旦那樣やら奧樣方……」

聲は止めぬが顧みるものは百に一もない。土方の親分らしいのが、二錢銅貨を投げてやつてからは、紳士も令孃も隨分と通つたが、顏を蔽ふて逃げるやう行きすぎる。

と、どやどやと一くづれ、工場通ひの女らしいのが四五人、白手拭を襟に卷いて、道で買つたのだろ、赤紙をたばねてこしらへた、割竹の柄の簪を幾つもさして何か大聲に笑ひながら下りてくる。

中に、水色の腰卷を裾まで長う、衣服は膝限りにからげた年增の一人、どう思つたのか、

「ま、かあいゝ子だわ。」

と、帶の間から一錢出して投げてやつて、

「罪がないね、笑つてゐら。」

と、立ち止まつて幼兒を見る。

續いた赤い腰卷の女等は、

「ま、姉はん、厭らしい。」

と顏をそむけて過ぎてしまう

「どうもありがたうございます。」

と縷衣は、幾度となく頭を地につける。が、道者がとぎれると聲も途絕れる。

折から、下手の山の中に、かさかさと音して現れた怪しのもの、蓬々たる髮に、白いまで砂塵を被つて、

「オイ源こ、酷えな貴樣、今日が日に己を出しぬきやがつて、どうだ、だまつてゐても半分は寄越すといふのか。」

これが例の助である。幼兒は、助を見ると、これでも覺えてゐるのか、なつかしさうに手を出す。

「すまねえた思つたが、おらあ、病つて、どうもかう

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

もしやうがねえだから、お鶴さに賴んで來ただ。今日のところだけ堪辨して、おらに、みんなやつてくんねえ。』

顏色をかへて、畏しさうに詫入る。

『酷えことをいふな源こ、毎日、二錢の借賃を出してるな、今日のやうな日を當てねえか、畜生ッ。』

慄い眼付て、子供の前の金を睨む。一錢が四つ、二錢が一つ、五厘が五つ。

數へて見て、助は、いくらか失望と疑ひの見(み)えて、

『これつきりか、ちと、入れたろ、貴様。』

と懐を指す。

『これきりだ、これきりだよ。』

とおぞおぞして源はふるへてゐる。

『だめだな貴様、おらに貸せ。』

引つたくるやうに、助は幼兒(こども)を抱いて山の中へ入らうとすると、幼兒は源の方を見て笑つてゐる。

くやしさうに、じつと片目て助を見つめた源、いざりの源は、急いで錢をさらつて懐に、むくりと起き上つて、

『おい、助公、ま、まて。』

と駈け出す。

下向の道者が、急いで下りると見るうち、曇つてゐた空から、大粒の雨がぽつりぽつり。

春の行方

大津留ちよの

○春のゆくへ

見渡せば見渡すかぎり青葉して
　春の行方のしるよしもなく

○文筆にたづさはれる友に

硯の海こぐ舟人のおもひをぞ
　くみてや神は守りますらむ。

はゝそばの心づくしのかひありて
　硯の海は立つ波もなし。

○さる君の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「此のまゝに死なばしなゝむ兎も角も
われにはつらき浮世なりけり」

と讀み給ひしに應へて、

死にてなほゆきにし國もつらからむ
おなじ心の人しなければ

水の精（第五回）

辻村靖子譯

或時妙なできごとのあつたのは、此お老爺さんは、たんとはいけないか飲酒家で、勞働にでゝかへつて來て、一家族と打よつて「二盞三盞のむのが唯一の至樂てあつたのです。所が二三日漁を休んだので、其酒かきれめになつて、一雫もないてすすると、宛然最愛子にても、離れたやうに、或晩も無情なそうに、不味そうに、四人と並んで沈みきつて、夕餐の箸をとらうとすると、少女は活々した聲調で、

「父さん、私今によいものをあげるよ。そんな六かしい顔をしないで、私と一所に一寸おいてなさい。ね一寸、いゝものがあるの、父さん眞個に」

老媼さんは、もう食膳の支度ができてるからと云ふてとめるし、老爺さんも何を又つまらぬ調戯つらをすると云ふ顔をして中々又座をたゝぬのです。夫を肩につかまつたり、手を引ぱつたりして、小兒のやうにせがいので、不承不承にてかけると、畑を通行つて石のがけを承下りて河測にてやうとする處に、枝さし蔽ふた楓がある。木蔭に、少女は蒼皇立よつて、堆い落葉をかきのけると、また新しい酒樽がありました。

「ね親父さんこれ私が上げやうと思つて、いつかから藏つて置いたの。」お老爺さんは半信半疑で、手をたそうともせぬのですか、何せよ主ありけな此酒樽を捨てゝも置けぬ。小屋までどうかして行かうとすると、空は俄にかきくもつて、陰風さいこと吹きそめたのです。少女は矗と立あがつて、天を睨まへて居つたのですか、

「雲も止れ、！　雨も降るな、！」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

其端正しい顔たちと、凛とした音聲とは、いつもながらぞつとするのです。
「止せ、勿體ない、天道さまのなさることを、止める等と云ふ罰當りがあるか、」
云ながら力をきはめて、樽を荷つて家へかへりました。四五たつてもとりに來人があるはづもなし、たのてす、明けてみるとまだ見たことのない、上等の醇酒だつたの、老爺さんは舌皷を打つて、大よろこひしたのです。
此青年と少女とは、互にいな離れられぬ赤縄かまつはつて居るとみえて、かりそめの宿をしたのか緣となつて、二人の身の上に大變化がおこりました。
青年はあくまで少女を戀ふてをり、少女も兄のやうに、友達とも親しげにむれついて居るから、行々は夫として妻としての契を結ぶことゝも、決して否とは云ふまいと、思はるゝほど、仲々よいのであるが、まだ表立つては誰も云ひださなつかのです。夫がいさゝかのことか動機となつてかりながらも其式をあげられ、永く棲みなれた一つ家も、我まゝ云ふたに父母の膝下をも、離るゝ運命となりました。
夫は此青年が來てからもう三月目恰度少女が父のために美酒を求めてかへつた其翌晩、ほと〳〵と門を叩くものがあるやうです。人里離れた一軒屋で門の戸をたゝくものとては、楢の木の葉が落るのか、猿の叫ぶこえより外、きくことはないのですから、何の音だろうと互に顔を見合はせました。
少女は、燈に顔を背けながら、
「おまへ地の靈では無いの、私の所爲か氣に入らないで、こゝまて附隨いて來て惡さをするなら、私はいゝけれと、クレボン（冷水）が決しておまへと許すまいが、……」
この不思議なことばときいて、兩親は目を見合はせたのです。外ては何ときいたのでしやう、とに角中ではまだ眠て居ぬと云ふのか知れて、力づいたとみえて、
「私は怪しい者ではこさらぬ、難船して命からがら、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

こゝまゝやつとたどりついたものでござるよ。情と思ふて内に入れて呉られい。」

何さま、怪しい者でも、凶いものでもないことは、其上品な言葉つかひによつて識れたので、四人の顔色は一時にとけたのでした。で少女か甲斐々々しく自分で、立つて戸をあけると、圓頂黒衣の老僧であつた。

このかけはなれた一つ家は、又も新來の客で賑はされたのです。瘦勞れもなをつて翌朝のはなしに、

自分は旅の僧である。噂にきいた暗黒の森林を、一つ探つて見たとい思つて、今朝自宅をでゝ、急の用であるから特別に舟を仕たてゝ、湖水の上を浮ひてると、今まては油のやうやよいなぎであつたのか、一陣の山をろしと共に何か水底で風かと思ふと喚ひ音聲きこゑると激しい波かたち初めて、舟はまるで嵐に吹からるゝ木の葉のやう櫓もかぢもたゝばこそ、一つ處をくるくると廻つてをつた。船子も自分も生た心地はなくて、舷につかまつたまゝ　運を天にまかせて居ると、其内一つ恐ろしい大波が來て、どさりと船に被つたか、夫から後は覺が無い、須更して氣かついてみれは、不思議にも打上けられて、芦荻の茂みに仆れて居つた。こゝは一體どこであるか。

なき妻

秋郎譯

汝がわが愛しきしとやかの
羞澁む妻となりしより
汝がにこやかに若やげる
ほゝゑむ妻となりしより
悲しさの世にひとりわぶ
沈む心も癒えたりき。

あゝあゝかなた夕づゝの
影も汝には光なき
そのかゞやける眼眸よ

あゝあゝかなた行雲の月の光に照さるゝ
其の色よりもほのかなる
素々たる汝が黒髪よ。

愛さも悩みも今ははや
汝が情に忘られぬ
汝が慰靈はとことはに
慈母の如かる眼をそゝぐ
天の女神のいますまは
けむれる如き紫の女神が愛を注ぐまは。

（ポーのユーラリイより）

「高野聖」

白露子

頃は壽永の春四月、　櫻の色も咲き出てゝ、
陽氣再びかへれるに、　世は刈菰の亂れ合ひ、
東に白旗西に赤、　打ち振る聲も勇ましや。
源氏は九郎兵を引き、　都を差して攻め上る、
平氏は將を遣して、　城東遙か防ぎしが、
武運や既に盡きたりし、　遠く都を西に落ち、
八島の方へ陣しける。　勝ちほこりたる源兵は、
互に功を競ひて、　二氏の爭闘暫時絶え、
平家再び振ひしが、　小松三位の中將は、
殘し置きたる北の方　稚き人の面影のみ、
夢にもひしと身にそひて、　忘るゝひまもあらなくに、
あるに甲斐なき我身とぞ、　打ちかこたれて三年の、
彌生半ばの曉の頃、　八島の方を忍び出て、
童三人を召し具して、　鳴戸の沖を漕がれける。
やがてぞ入りし紀の港、　心は野越え山越えて、
はや故郷に着かれしが、　弓矢とる身の習とて、
叔父上すでに捕へられ、　われまた恥をさらしなば、
無念や如何に遣る瀬なき、　千度心は進めども、
道を高野にまげ給ふ、　そこに年比知り合ひの、
尊き聖住まれけり。　その名は濟藤時頼と、
世を捨てられて又の名は、　高野の聖瀧口と、
幼き折りは中將に、　仕へ侍りてありにしが、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

年十三になりし頃、　大宮所に召されけり。
同じ頃ほひ横笛と、　云ひ囃されし女あり、
見目いと人に勝れしが、　瀧口心是れを愛で、
身も魂も傾けぬ。　此の事早やも洩れ聞え、
父上怒りのたまはく、　「和子は何とて斯様なる、
由なきものを思ひそめ、　父の心に違へるぞ、
われは御身の爲にもと、　榮ある人の婿子となし、
出仕も易くせさせんに、　何とて思ひ違がへるぞ、
疾う〳〵夢を醒まして」と、　訓されければ入道は、
膝押し進め申しける。　「昔はありし西王母、
今はや既になき數に、　東方朔も名のみ聞く、
老少不定は世の運命、　人の生命を延べしとて、
などて八十路は越ゆべしや、　死して血氣の盛れるは、
二十年餘り長からず、　夢幻の人の世に、
醜きものを片時も、　見もし見られて何かせむ。
さりとて戀ひし人見むは、　父の言葉に背くべし、
あはれ浮世のつらければ、　今を境と押し分けて、
眞の道に入らむ」とぞ、　我と我が身を捨てものに、

嵯峨の里にぞのがれける。　取つて十九の花の世を、
往生院に行澄し　あぢきなき世と經誦して、
世をばはかなみ給ひしを、　聞き傳へたる横笛が、
「我こそ捨てめ樣をさへ、　我故換へし御事の、
いた〳〵しうぞ候を、　よしやこの世をのがるとも、
などて一言しか〳〵と、　給らざりし情にも。
お心如何に强ととも、　尋ね參らせ恨みん」と、
思ひつゞけて或る夕邊、　都の空を立ち出でゝ、
嵯峨の方へぞ忍びける。　頃は如月まだ寒き、
梅津の里の春風に、　餘所の匂も身に秘めて、
人も通はね大井河、　さす月影も朧にて、
霞の袖もいと重く、　往生院とは聞きつれど、
さだかにそれと知れざれば、　さまよいあるきイみて、
輕き裳も露に沾れ、　下駄緒ににじむ赤き跡、
尋ねわびしぞあはれなる。　夜も追々に更け行きて、
あたり寂しき山里や、　住み荒したる僧坊に、
まがうかたなき入道が、　讀經の聲をそれと見て、
噪げる胸を押し鎭め、　「あらいたはしの御樣の、

替りておはす御君を、　見もし見えも參ゐらせむ、
爲めに妾は是までは、　參り待りて候」と、
女の人を立てゝ申せしに。　入道心安からず、
世は捨てしかど流石に、　昔の樣の偲ばれて、
物の蔭より打ち見れば、　袖は涙に裾は露、
打ち絞りつゝなよやかに、　やゝ衰へし顔ばせの、
歎を含むその樣は、　霜になやめる白菊か、
それにも增して乙女子の、　あはれ夜更けて笠もなく、
寂しき野道たよ／＼と、　此處まで來つるやさしさよ
二本三本後れ毛の、　風にそよぐも物うしや、
肩の細りも誰が爲め、　あはれに立てる其の樣を、
一目かいま見逢ひもせば、　德たけ道を積みし身も、
いかで心の鈍らざる。　入道いかに思ひけむ、
法衣に顔を差し埋め、　暫時默してありにしが、
もとより雄々しき性質なれば、　人を出して應へける。
「此處にはさる人候はず、　若しや門口取り違へ、
こなたへ參られ候はん、　他所へ御出で候へ」と、
横笛聞いて情なく、　つれなき君と恨めども、

力及ばて乙女子の、　涙押えて歸りけり。
其の後入道同宿の、　僧に語て是も世に、
「閑靜の里にて候へば、　讀經の道は障らねど、
あかで別れし女あり、　此處の栖居を見られては、
たとへ一度は强くとも、　再度慕はれ來られなば、
熱き情にほだされて、　道心搖るぎ候はん、
暇申す」と立ち出てゝ、　高野の方へ打ち上り、
其の名も淸淨心院に、　行ひ澄して居たりける。
其の後優しき横笛が、　同じく世をは果かなみて、
苔の袂にかへしとぞ、　傳へ聞きてはあはれにも、
入道歌を書きそへて、　「つらしとてこそるまでは、
恨みしかども梓弓、　眞の道に入ることの、
うれし」とてこそ遙る／＼と、　情の文を込めしかば、
「何か恨みむ梓弓、　引き止むべき我ならじ、
安くおぼせ」と反しける、　世にも愛てたき横笛は、
其の後奈良の法華寺に、　寂しき月日送りしが、
思ひの數や堪えざらむ、　瘦せ細りてぞ失せにける、
入道このよし聞き傳へ、　いよ悲しみわづらひて、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

痩せさらぼへる其の姿、都にありし花やかの、
優し男の影もなし、一向後の吊ひに、
戒行世にもいや勝れ、父の不孝も宥されて、
世の人々も賞めたゝへ、高野の聖と申しける。(完)

女子青年會記事

●會告

拜啓時下愈々御清福奉欣賀候陳者別紙趣意書の通り基督敎女子青年會の發起を以て一昨年以來引續き女子のために夏期講習會を東京青山女子學院構內に開催仕り候處二回共誠に豫想外なる好結果を得候事は雜誌明治の女子にて委しく御覽被下候事と存し候就ては本年も第三回の夏期講習會を同所に開催致し相互の益を計り度候間貴所に於せられても宜敷御誘導被下一人も多く御出席被下候樣相願上度別紙印刷物相添へ右迄申上候

敬具

六月

日本基督敎
女子青年會

○大阪プール女學校內
女子青年會報告

一、仰せに從がひ及ばぬ筆ながら當會の近況謹んで御報告いたすべく候

三月十八日役員左の諸氏に改撰いたし申候

會長	トリストニム
會計	吉本あさ
祈禱部長	小泉ふさ
慈善會部長	酒井まき
慰問部長	田中はな
日曜學校部長	副島さわ
勸誘委員	島井とめ
書記	春海たまゑ

五月十三日新學期の集會を致し候。會員も勸誘委員の御盡力によりて增加いたし、益々發展の途に上り居り候各部の情況まづゝだけ記すべく候。

一、日曜學校は現今五ケ處に設置いたされて多數の姉妹等その任に當られ上帝の福音を傳へ居り候、去る十日土佐堀青年會館にて少年少女大會を催されれ未來の宗教家未來の良妻賢母が手腕を奮つての集り實に盛んにて候ひき。

一、慰問部は或は會友の病床に花をさゝげ紡績社の寂莫をねぎらひ或は聖句を傳ふる等中々熱心に活動いたされ居り候。

一、祈禱部も出席數の增加の感話そのよろしきにかなへる等上帝の恩惠の下に進歩いたし部長は時々適切なる警言を吐かれて會員を勵まされ居り候

一、慈善部にては去月會友の手に成りし數品を岡山なる孤兒院に寄附いたし現今の西洋前掛、四季袋、よだれ掛、手袋、金入、しをり等雜多これあり尙熱心に製作いたし居候來月下旬校內にて賣り拂く目算にて候。

一、會計上よりは時々必要に應じて出金いたさし居り候先月印度の主に在る人々より本會へ金十圓惠送せられしが會議の結果紡績工女のために用ゆべく可決いたされ申候。

一、今度先生御一方入會なされ開會の當時の御話は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

私共に最も大切なることゝ覺え候ふまゝ先生の御訓言左に相添へ申候　　以上

大阪プール女學校

五月十三日　　女子青年會書記

○青年てふ事に就て

今本會の席末を汚し報告其の他の事によりて知り得たる當女子青年會の活動の情況の前に立ちまさりて高尙眞面目なるを見て新に會員たる事を許されしを一層光榮に覺ゆるなりそもそも青年期は兒童期と壯年期との中間とも云ふべきなれども現今青年てふことを活潑なる活動の存する處に冠せらるゝこと多きが如し、乃ち青年團と云ひ青年會と云ひて實は壯年者の之に加はるも多く観る處なり蓋し活氣滿々恰も新綠孜々たるを意味し且は老朽に對してかゝる語を以てせるなり、然れども飜つて考ふるに一面大に省悟せざるべからざる一事あり。人言はずや、青二才……未だ青し……と

知熟せず意熟せず、情も亦熟せず。而も羈絆(きはん)を厭いて獨行せんと欲し、われより先覺は凡て識者とし命唯々として奉じたる傾向少しもなく成否を考へずして遂行せんと試む、放浪ノ流離、蹉跌又蹉跌して行くに處なくなすに業なきに至る、噫これ皆青年期の恨事といふべきなり、一面には活動あり、一面には朝の如きおそれあり、兩者を如何にすべき？實に青年たる者かたい殼かたい殼青年期！されども諸嬢はこの難路をばよくも歩武蒼々として活氣滿々たる行動をとらるゝをいさゝか怪しむに價するもの〻如くなれども實は然らず、即ち我等熟せずといへども常に圓熟完全なる大幹に列りて活動すればなりこれによりてするにいかで成熟せざる事のあるべき祈りによりて導かれ導れて事を成さば安全にして且價値あり我等幹をはなれて何事をかなし得べき、あわれ常に上帝か仰ぎまつれかし、

約　十五章五、六節
弗　四章、十四節

○女子學院青年會記事

去る八日御差出しの御葉がき拜見仕り候、都合上御返事延引のだん御ゆるし給はり度候、さて此度改撰の結果は左の如くに御座候。

會　頭　　福山とく
副會頭　　伊藤京
書　記　　三島みつ

四月十二日
四月二十二日　共に有益なる祈禱會に御座候ひし

五月三日聖書研究會をひらき新約ピレモン書くべき益ある教を學び申し候。

また此度佐渡國なる基督敎傳道者の困難なる有樣を洩れきゝ候につき本會より月々壹圓五十錢を無限に寄

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

附する事と決定仕り候之を以て校會の働きと致して多き心得に御座候先は御通知まで早々

五月十七日

女子學院青年會書記

○宮城女學校青年會報告

たび／＼御手紙下され誠に恐れ入り候。去る五月二十二日に於て再び御はがき戴き候へどもすでに二十日の夜私共青年會の變化發達有様などくわしく認めプログラム一枚そへてさし上げし後なれば定めて紙面行きちがひのあやまちと存じ其のまゝにいたしおき候處また／＼御示しいたゞき實に事の意外なる一圖おどろき居り候

誠に御申わけなく幾重にも御詫び致し候。

さて私共會員は公平なる神の御手の下にあり身も精神もすこやかに平和活動いたし居候。

去る三月二十一日を以て會員は凡べて役員委員を新に撰擧いたし候委細は別記プログラムにて御了知なし下され度候。又一學期に一度つゝ仙臺市に於ける有力なる御方の祈禱にて御話を御願いたするに定め申候。

此の頃は青年會役員も稍々忙しき有様に候。これも會の進歩とうれしく存じ居り候正會員は六十三人。會員は八十二人。新入會員二十八人にて候。

御存じの如く校長ミス、ズフルーの歸國につき役員も非常に心配いたし候ひしが幸にもミラー校長ミス、ハンセン、ミス、リンゼー氏の如き有力なる先生を得て日に月に進歩いたし居り候まゝ御安心給はり度候。殊にミス、ハンセン、御在米の時は青年會の會長にあげられ、ミス、リガゼーは會計を御務めなされし事とて經驗少き私共を御助け下さること一方ならず候。なほ今年は夏期講習會はいづこにて開催あそばされ候や。當地誠に僻地には候へども夏日は涼しく松島もまぢかきことに候故もしも神の御心に候はゞ當地は如何かとも存じ居り候一寸御知らせ下され度候。

音樂會のことども御知らせいたすはずに候へどもすでに御承知の事と存じプログラムだけさし上げ候先づは御知らせまでかしこ

新任役員は左の通りに御座候。

役員氏名

會長　田邊ひさ
副會長　及川なほこ
書記　十二村いき
通信書記　氏家ときこ
會計　久道みさほ

誘導委員

木村より　岡本ちや　黒澤ふくす
萱間うん　赤澤さわ

集會委員

廣岡いと　阿部茂　岸波きく

親睦會委員

池田ちん　鳳入みは　小野あいこ
岡うめ

通信書記　氏家時子

○宮城女學校基督教女子青年會大音樂會

執行順序（明治四十一年五月廿三日午後六時半開會）

第一部

一　開會之辭　青年會長　田邊ひ
二　蓄音器（五種）　ステツク教師
三　唱歌「流れ」（メンデルソン作）　宮城女學校コーラス
四　ピアノ獨奏「スプリング、ソング」（メンデルソン作）　スアルツ孃
五　パンジヨー及獨唱「アスレープ、イン、ゼ、デープ」（ピートリ作）　ザウグ教師
六　コルチツト獨奏「ゼ、ロスト、コード」（スリパン作）　ステツク教師
七　唱歌「カーム、オン、ゼ、モーン」（復活祭ノ歌）　東六番丁教會唱歌隊
八　ピアノ連彈「ロザモンド」（シユバート作）　（ミラー夫人　ハンセン孃）
九　琴「東獅子」　田澤とら子
十　獨唱「サイレントトレープレンデング」（モザート作）　サイプル夫人

（休憩）

第二部

十一　ピアノ連彈「ホレロ」（ストレーボク作）　（十二村いき子　小野あい子　氏家とき子）
十二　獨唱「ヴアイオレツツ」　スアルツ孃
十三　ピアノ獨奏「ソナタオブス第七番」（ベートホーフエン作）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ハンセン讓

十四　蓄音器（五種）　ステツク教師

十五　獨唱「ソロモンリーヴアイ」（大學生ノ歌）　ザウシ教師

十六　詩吟「下二筑後河一」　永沼柏堂翁

十七　獨唱「ハーツ、デライト」（ギルクリスト作）　サイプル夫人

十八　琴連彈（六段）　伊澤のぶ子　岩崎きよ子

十九　ピアノ連彈「フアンフエール、デス、ドラゴンス（パスコヴイツツ作）」　宇田まさ子　佐藤こと子

二十　唱歌「虹」（ロツセニ作）　宮城女學校コーラス

廿一　閉會之辭　ミラー校長

廿二　君が代二回　會集一同

以上

○横濱共立女學校青年會記事

會には何の變化も無之候至極平穩にあのかじゝ働き居り候まゝ従つて別段御報告申上ぐる向も御座なく候諸姉らの御はたきの上に神の御祝福常にあらんやう祈り上げまゐらせ候かしこ

五月二十三日

共立女學校

青年會

○名古屋青年會運動會記事

明治四十一年五月六日新綠翠滴が如き好時季に際し今日茲に名古屋青年會第一回春季運動會を郊外なる末森と稱する城山に午前十一時開催す山上には平地ありて倘老松日影を蔽ひ休憩に便宜を得

午餐後一時間自由運動を試漸く二人或は三人の來會者ありて總數二十二名となる午後二時より遊戲委員の準備せられたる場所にて左の順序により遊戲を開始す

一、格言合せ　二、盲啞戲爭

三、ハンケチ取り　四、縫取競爭

五、輪拾ひ　六、ナツツインメー

七、電信遊ヒ　八、瓢簞

九、芋虫遊ヒ

時間の都合により三、七、八、項は之を省略せり終りて一同の茶菓を喫す讃美歌百七十六番をともに歌ひ副會長廣瀨姉の篤き感謝祈禱あり後讃美歌三百八十六番四百十四番を歌ひ一同樂しく愉快に午後五時散會す

紀念の爲ウヰルソン會長は一同の寫眞を會場に於て撮影せらる

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

YOUNG WOMEN
OF
JAPAN

Vol. V. *June, 1908.* *No. 6.*

Miss M.A. Whitman, Chairman

Dr. Kei Okami, Vive-Chairman

Miss A.G. Lewis, Recording Secretary

Mrs. G.M. Fisher, Treasurer

Miss Michi Kawai, Active Member of the World's Committee

Miss Sumi Miyagawa, Corresponding Member of the World's Student Christian Federation

Resident Members	Non-Resident Memebers
Miss Ume Tsuda	Miss K. Tristram, Osaka
Mrs. Hatsu Watanabe	Miss Michi Matsuda Kyoto
Miss A. B. West	Mrs. G. S. Phelps, Kyoto
Dr. Tomo Inouye	Miss E. M. Soper, Nagoya
Miss Hama Hirano	Miss N. B. Gaines, Hiroshima
Mrs. Hana Ibuka	Miss L. Zurfluh, Sendai
Mrs. Koharu Nakajima	
Miss Uta Suzuki	

Miss A. Caroline Macdonald,
General Secretary

Miss Stella C. Fisher,
Assistant Secretary

Headquarters :— 15 Dote Sanbancho, Kojimachi,
Tokyo

421

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治三十七年、月七日第三種郵便物認可

YOUNG WOMEN OF JAPAN

Vol. V. *June, 1908.* *No. 6.*

CONTENTS

THE SUMMER CONFERENCE

EDITORIAL :—

Divine Revelation through Flowers.... K. Kawazoe
Eternal Life.............................. T. Ito

RELIGIOUS :—

Joy and Power..................... Dr. VanDyke

MISCELLANEOUS :—

Various Ways of Walking.............. H. Omori
Animals' Affection for their Young........ Yamada

LITERATURE :---

Life............................ H. Shimonaka
A Sketch......................... Chiyono Otsuru
Water Princess (continued)........ Yasu Tsujimura
Eulalie .... E. A. Poe
Translated by Akiro
"The Sage of Koya (a Poem)............ Hakuro

ASSOCIATION NOTES :—

Reports.

東京神田美土代町三[illegible]舍印行

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA